



ニッケコルトンプラザ敷地内にある神宮の森

鬼高の地名は、本市の中でも、その由来が最もはっきりとした地名の一つです。それは、明治四十四年から大正八年にかけて実施した「八幡町外九ヶ町村耕地整理組合」による耕地整理の結果、誕生したものだからです。

耕地整理以前のこの地域は、江戸時代以来鬼越村、高石神村（当時、中山村の大字）の飛地が入り乱れていた所で、耕地整理が終了しても、区分をするのに困難をきたしました。そこで、中山村では、総武線以南の地域を一括して、新たに「鬼高」と名付けました。これは、鬼越の「鬼」と高石神の「高」と、それぞれの大字から一字ずつ取ったものです。

さて、この地域は市川砂州上にあり、千数百年前には、現在の二丁目と三丁目の境界あたりが、当時の海岸線だったことが、昭和十

鬼越と高石神の飛地が合併

鬼 高

二年に発見された遺跡によって明らかになりました。これは、共立モスリンの工場造成工事のさいのことで、調査の結果、古墳時代

後期（千四百年ほど前）の杭木と貝塚が出土しました。これは当時、海岸に作られた杭上遺構と考えられ、鬼高遺跡と名付けられました。

また、ここから発掘された土器には、鬼高式土器の名称が付けられ、考古学史上重要な遺跡一つとして、昭和六十三年七月五日、市の史跡に指定されました。

また、この地域には沼地が多く、「判官面」（二丁目）、「身洗場」（三丁目）などと呼ばれた所もありました。これには、次のような話が残されています。隣接した「小栗原」（現在の船橋市本中山）の領主小栗判官という人が、この沼地の一つに馬で乗り込み、動けなくなってしまう、普段信仰していた不動尊のご利益（りやく）で抜け出すことができました。それから、判官が動けなくなった沼を「判官面」、泥だらけになった体をきれいに洗い流した所を「身洗場」と呼ぶようになったというのです。

大正九年、上毛モスリン中山工場が創設され、昭和二年には共立モスリン中山工場となり、さらに同十六年に日本毛織株式会社が吸収合併して、日本毛織中山工場となりました。手編毛糸・メリヤス糸の生産にあたり、最盛期には二千五百人の従業員がいましたが、時代の流れで昭和五十七年工場を閉鎖しました。その跡地が、昭和六十三年にニッケコルトンプラザと市川プランタンとして生まれ変わったのです。

今回は「加藤新田」を予定しています。
（社会教育指導員・綿貫喜郎）